

【概 説】 — 子どもの語る「象徴言語」の学び —

山上 千鶴子

生命(いのち)とは、その本性において猥褻^{わいせつ}かつ猥雑^{わいざつ}なものだ、とわたしは思う。赤子は、生きんとして「愛の対象 the loved object」(まずは、部分対象「母親オッパイ」)をとことん貪^{むさぼ}り喰い尽くそうとする。一体化を希求して止まない。そうした「生の本能 life instinct」には、性愛的であると同時に破壊的な衝迫^{しょうぱく}がうかがわれる。さらには、「死の本能 death instinct」、すなわち飢餓感、痛苦、憤怒、憎悪、そして凍^こてついた感情、その果ての虚脱感^{きょだつかん}は、赤子の脆弱な自我にとって圧倒的であるから、「母親オッパイ」に投影される。コンティンされるために・・・そうした「生の本能」と「死の本能」の熾烈なアンタゴニステックな闘いのなかで、赤子はひたすら生きんとして、そのいのちは遮^しり無^に二^に突き進む。荒ぶる野獣のように猛々しく・・・だが、どうやらそれだけではなさそうだ。

遠い昔のことになるが、ロンドンの或る友人宅で、こんな観察をしたことがあった。誕生間もない、確か一ヶ月そここのミツアキくんという男児であったが、おなかがすいたのか、ぐずり泣きを始めていた。母親は台所で忙しく立ち働いていた。用事を済ませるのに手間取り、ようやく彼のところに戻ってきたときには、彼の泣き声はだんだん緊迫したようすとなっていた。母親は彼を抱き寄せ膝に座らせて、あやしながら懐^{ふところ}からオッパイを取り出して、彼の口に乳首を近づけようとした。だが、彼はいっかなそれを啜^{くわ}えようとしな。それから泣きやむどころか、なんと顔^{おもて}を背けた。からだをぐいと母親から引き離し、そして尚いっそう泣き声を張り上げた。この世の終わりかといったふうな痛烈な悲嘆、憤怒の形相。彼はからだを突っ張らせて、口を大きく開けて泣いていた。確かに烈火の如く怒っていたともいえる。いつもだと吸い付きのいい子がどうしたのかと訝しく、わたしは傍らで覗き込んでいた。なんと彼の口は、まるで真っ赤に燃^{たぎ}え滾るマグマが噴き出る「噴火口」みたいなのだ。確かに、ここへ「母親オッパイ」が押し込まれたら、火傷^{やけど}をする！それでヤバイ！と彼が瞬間的にそう判断したように思えた。わたしは不思議な感慨を覚えた。赤子がお腹をすかせていたのは確かなのだ。だから彼はその口唇的渴望を自ら抑制し、敢えて「母親オッパイ」を遠ざけたということが不可解だった。そして何やら妙に納得したのだった。そこには、「オッパイ」の「保全(wellness)」を確保せんとする意思がありはしないか。・・・それからどうなったか記憶が途切れてしまったけれど。母親は忍耐強く頻りにあやしていたから、やがて赤子は落ち着いてお乳を吸ったに違^{ちが}いなからう。わたしには、この彼の「時間稼ぎ」がとても不思議だった。赤子には、「母親オッパイ」が彼の「死の本能」をコンティンすることができず、むしろそれによって圧倒され、大いに損傷をきたすのではないかと不安があったようにうかがわれる。すなわち、「母親オッパイ」を破滅させまいとし、「無^む疵^ずなまま生き永らわさせること(sparing)」の配慮がここにありはしないか。そんなふうには、「母親オッパイ」が消耗・疲弊に陥ることを赤子は恐れるし、したがって自分の貪欲さを制御せんとするところの働きが備わっているようではないか。だから、彼の内でその不在ゆえに悪しきものとなった「母親オッパイ」が良きものとして回復するまでは、つまり彼の「死の本能」をコンティンできるまでは、赤子は敢えて自ら「母親オッパイ」を求め^もぐことをせず、むしろ顔^{おもて}を背けたということではなかったのか。

実際の母親は、ひたすら赤子を生かそうとして、「死の本能」から派生される破壊的衝動、すなわち迫害不安そして羨望に堪える。それらを宥め、鎮め、そして制御する。「生の本能」についても同じだろう。赤子を自らに愛着させながら、そのリビドー的衝動を統合へと導いてゆこうと懸命になる。そしてここで、クライン派的見地から肝腎要となるのは、赤子およびその「愛の対象」のいずれもが破滅の危険から護られるために、「母親オッパイ」の内側に於いて「父親ペニス(=乳首)」が機能していることなのだ。この「結合対象 the combined object」(部分対象レベル)が要諦である。上記のミツアキくんの観察には、そのように「母親オッパイ」を統括し、そのレジリアンスを擁護するところの「父親ペニス(=乳首)」の‘原初的な取り入れ’がどうやらかがわれる。なぜそうなのかはおそらく誰にも分からない。だが、この‘謎’がわたしを密かに喜ばせた！

では、「母親オッパイ」も、その内側なる「父親ペニス」も機能不全となれば、どうなるか。それらは、われわれの臨床実践において出会う子どもたちの臨床像におそらく散見されるだろう。そもそもそれらの機能不全が何に起因するのか。外的現実は何論検証に値するだろうが、今一つ赤子の内的現実というものの実態を覗いてみたい。赤子は「母親オッパイ」を無疵なまま生き永らわせるために‘危険な賭け’に出ることだってある。つまり、赤子が危険視した、自ら生きんとするための「生の本能(life instinct)」を敢えて‘堰き止めんとする’のである。そして、「死の本能」(death instinct)が優勢となる。むしろそれら両者のアンタゴニステックなせめぎ合いは頓挫したまま。いのちが生きながらにして麻痺している状態といったことになる。そして、いのちが枯渇する。こころの成長が阻害されてゆく。

その動かないいのちを目覚めさせようとして、子どもの分析治療において、メラニー・クラインは、「母親オッパイ」そして「父親ペニス」といった原初的な「象徴(シンボル)」を導入した。この場合、シンボルとは「親そのもの」ではない。そのオリジナルな対象を肩代わりすべく、置き換えられたもの。そしてそれは、「死の本能」から派生する「破壊衝動」をコンティンするものとなるわけで…。そして、眠っていた子どものいのちが息を吹き返す。「症例ディック(Dick)」がいい例だ。「象徴」を媒介として事物や対象との繋がりが確立されてゆく。そして不安やら他の感情もまた賦活された。そのように彼はやがて目覚めていったし、もはや自らの内なる衝動を堰き止めることもしなくなった。水路付けが可能になった。それら「母親オッパイ」そして「父親ペニス」といった‘原シンボル’に呼応するかたちで外界のいろんなものが呼び集められた。そのようにして、それら象徴関係(symbol relations)をとおして、彼のこころの内にさまざまな‘意味の連結’が拡がり、そして彼固有の‘内的世界’が創造されてゆく。そんなふうに、こころが展開してゆくのであった。わたしたちクライン派は、そうした伝統を引き継いでいる。

つまりのところ、プライマリーな愛の対象「母親オッパイ」との「距離化」が図られる。その意味でも「象徴(シンボル)」は「脱性愛化」を助ける。「社会化」ともいえるが、それへ向かってやがて赤子は苦心惨憺することになるわけで…。わたしの<プレイグループ>での子どもたち(5歳までの)の観察を通して、そのこころの営みがどれほどものかがうかがわれた。だが、やはりセラピー過程においては、その苛烈さは

圧倒的である。そしてセラピストの「解釈」とは、「母親オッパイ」と子どもの中の赤子を‘切り離す’そして‘繋ぐ’ことに集中するわけで…。つまりのところ、それ自体が「父親ペニス」の役割といえる。子どもは「母親オッパイ」との一体感を脅かされ、それに対峙しなくてはならないわけで…。それぞれが奮戦する。引き裂かれまいとして、その一体感に執拗にこだわる。例えば「症例アンドリュー」のなかの‘レディ・カイト(凧)’であるが、たとえわたしと距離があっても、紐で繋がっていると彼は思う。つまり自分の手の内にそれ(つまり転移上ではわたし)があるという意味。そこで一安心というわけだが、それもしばしば「父親ペニス」の介入によって断たれるのであるから、とことん油断できないわけなのだ。そして、セッションの‘時間的制約・規制’が「父親ペニス」の表象するところであるのだから、それに断固抗う彼がいたわけで…。だが、やがて‘取り入れ同一化’を経て、「距離化・治療枠組」が徐々に受け入れられるにつれ、内的秩序が整う。そして、自己および愛の対象のどちらについても辛うじて破滅の恐怖は回避されるに至った。その例証として一つ、アンドリューが最後のレビュー・セッションで語った「Mr.&Mrs.レインボー(‘虹’ご夫妻)」が挙げられる。抑うつポジションに於ける「結合両親像(combined parental figures)」として注目されましょう。

そんなふうに己の「欲する感情(wanting feeling)」を巡って、罪やら疚しさゆえにそれを根絶やしにせずとも、しかも己の独占欲で「愛の対象 loved object」を疲弊させ死に追いやることのないためにも、自分のなかで徐々に折り合いを付けてゆくといったことになる。セラピストの「不在」および「現存」が転移状況のなかでワークスルーされるにつれて…。事実、病院内では、セラピストと対になる「ホスピタル・ダディ」といった「父親ペニス」的存在が子どものなかで大いに脅かしとなるわけだが、やがてそれとの象徴関係が、自分の貪欲さ或いは自慰空想ゆえに惹き起こされた罪障感を緩和すべき梃子にもなってゆく。すなわち、「慈愛ある父親ペニス」、もしくは「母親オッパイ」との関係に於ける「修復する父親ペニス reparative penis」が懸命に希求されてゆく。そしてそれら「結合対象」こそが、われわれ誰もが生涯をかけて試みんとする「内なる世界の創造」の礎としてあるということになりましょう。

さて、ここに提示されます臨床例の「分析の子どもたち」は、どの子ども実にも衝撃的です。そのいのちの苛烈さに圧倒されますし、子どもながらそれぞれに、‘己の生を証しする’ことに果敢であることに深い感動を覚えます。それぞれに‘いのちの躓き’を抱えていた彼らのセラピイに於いて、何がどの程度ワークスルーされたのか、そしてどこで頓挫しているのか、それぞれの症例を比較してご覧になられるといいでしょう。問題の核となるのは、子ども側の「死の衝動」の重篤さであり、また「母親オッパイ」側のレジリエンス(resilience)、それら2つの兼ね合いでありましょう。つまりのところ、子どもは自分が生きるためにどこまで「母親オッパイ」を犠牲にせんとするのか、あるいは「母親オッパイ」を生き永らわせるためにどこまで己のいのちを犠牲にせんとするか。すなわち愛の対象に背くか、己自身に背くかのいずれか…といったアンタゴニズム antagonism であります。そしてそこには、創造的な「修復する父親ペニス(reparative penis)」の存在の有無というのが極めて重要な決め手になろうかと思われまます。

いのちの格闘は、精神分析的に見れば、己が‘一人であること’に徹底して観念することが強いられます。己を引き受ける (be responsible) ということが目的とされる。‘一人になること’の厳しさ、辛さ、怖さに耐えられること。しかも「愛の対象」に背を向けることなく。。そんなふうには、どちらもがお互いの内において‘贖われる’ということが究極に希求されてゆく。それが精神分析の眼目だとわたしは考えています。「愛の対象」を生かしながら、自己もまた生きられる道を希求する。これがわたしのことばでは「贖いの器」であり、サイコセラピイの場とは、煎じ詰めて言えばそれではなからうかと思っている。

ところで、これらイギリスの「分析の子どもたち」の症例をとおして、それら‘いのちの格闘’がそれぞれ個々にいかなるものであったのかご覧いただくとき、おそらくあなたもその胸に覚えるであろう「衝撃」とは、実のところ【京都大学(教育学部)】の地下にあった「心理教育相談室」でのかつてのわたしのセラピイ体験に端を発していると言えます。それらはむしろ直結している。真に、‘一連なり’なのです。

当時のわたしの子どものクライアントは、どの子ども破壊衝動・攻撃欲に富み、プレールームでは散々な暴れようだった。死とか殺戮とか。。充滿していた。例えば、小熊が床に叩きつけられ踏んづけられるやら、アトム人形は頭をトンカチで激しく叩かれるやら、男の子人形は機関銃でく眼も鼻もオチンコもお尻もお尻の穴も。。>と猛烈な攻撃にさらされるやら。。まったくのところ‘暴力三昧’なのだった。これはなんとわたしは目を瞠った。当時「アンナ・フロイト」の諸論文をいろいろ読んでいたが、目の前で繰り広げられる子どもらの遊戯の数々、それらの意味など到底わたしの理解は及ばない。まともな解釈など出来やしない。何ら介入できないままに、彼らがそれぞれに、吃音のヒロシ君も、「Narcissistic Personality Disorder」と診断されたシンヤ君も、どんどん活気が出てきて、やがて‘成功例’として終結したのだから、なんとも不思議だった。その折りの衝撃は、わたしの胸深く刺し貫いた。

さて、ここでシンヤ君の症例記録の抜粋をご覧ください。

[※本児の臨床像；現在7歳7ヶ月。4歳下に妹がいる。仮死状態で産まれている。祖父母に溺愛されて育った。多分にひ弱な感じ。主訴は、情緒的に幼稚・未熟。社会性および自立的な生活習慣の目立った遅れ。学校で友だちができない。抑うつ的で情動静止。白昼夢に生きている感じ。]

■ 或る日のセッション(1970/09/19)；

蛇を手にとって、<怖いぞー>とわたしに襲い掛かってきた。わたしが逃げると、キャキャ喜ぶ。砂場へ行き、それを砂の中でクネクネとうごめかせていたが、それは次第に砂の中へと埋まってゆく。それから虎をとってきて、砂に埋める。グルグルと渦を巻いて、動物は落ち込んでゆく。<助けてえー>と叫ぶ。<助けてえー>を繰り返す。思う存分叫んだあとに、<もうあかんのや。。>と言う。蛇は気に入らないというように、砂から取り出して、無造作にポイと傍らに投げ捨てる。そしてひどく調子づいて、オモチャ棚から豚、馬、キリン、象を取ってきて、次々に砂の渦の中へと巻き込んでゆく。<助けてえー>と叫び、<もうあかんのや。。>で終わる。わたしが<かわいそうやわ。何とか助けてあげられへんの？>と尋ねるが、<誰も助けられへんのや。。>と彼は返答した。<助けてえー、助けてえ

ー>と思い切り叫ぶ。そのうち「親らしきもの」を取ってきて、砂の渦の中に落ちてゆく動物たちの側に置く。わたしが「誰も助けてあげられへんの？」と訊くと、彼は「誰も助けてあげられへんのやー」とキツパリと挑戦的な物言い…。「あーあ、もうダメだ。埋められたあ…」と彼。それに対して、わたしが「かわいそうに…あーあ、わが子よ。涙ポロポロって流しているよ」と語りかける。さらに動物たちを砂の中へと埋めてゆく。「助けてえー」、「ああ、もうダメです…」、そして「涙ポロポロだわねえ」。その繰り返しである。何度かやった後、「わが子って何？」と、彼がわたしに尋ねた。わたしが、「お父さんやお母さんは皆、自分の子どもが可愛いから、わが子が死んでゆくのが悲しいの。だから涙ポロポロって泣くのよ」と説明する。「フーン…」と彼。しばらくしてブルドーザー（ミニ・カー）を持ってきて、砂の中に埋められていた動物たちの引っ張り出しに取り掛かる。そして一つずつ丁寧にそれぞれの‘親’と対面させてゆく。そこでわたしは、「お父さん、お母さん、子どもが助かって嬉しいね。良かったわね」と語りかける。彼は、すべての動物たちをきれいに引き揚げる。それからしばらくオモチャ棚のものをいじっていたが、一個の人形（木製）を取ってきて、砂の中に埋めてゆく。黙ったままそれを取り出し、再び埋めることを繰り返す。…

このわけの解らなさ！そして、面白さ！わたしは心底彼らの語る「象徴言語」に魅せられた。問題は、なぜそれが‘治療的 therapeutic’なのかということ。さらには、どうやらこの「Symbol Formation（象徴形成）」ということが「こころが育ってゆく」決め手としてあるらしいと気付いたのだが、それが謎であった。だが、ここにこそ‘いのちの真実’があるのではないかと直観した。「それは何か？」の問いを抱く者は、それに^{こた}応える者になる宿命から逃れられないようだ。「児童分析」の本格的訓練を受けることをわたしは決意せざるを得なかった。「見るべきものを見なくては…」がここから始まった。

それでロンドンの「ハムステッド・クリニック」から案内書を送ってもらった。その内容はあまり魅力的とは思えなかった。とにかく情報視察だけでもいい、彼の地に赴くことを思い立った。取り敢えずあちらのチャイルド・サイコセラピストの養成機関について情報を得ようと京都の【ブリテッシュ・カウンシル】を訪れたが、まったくの空振りであった。それからツテを求めて渡英経験のおありの方々にもお会いしてみた。たまたまそのお一人に、Dr. M. Carvelという麻酔医の女性と知り合いだという方がおられて、わたしは紹介され、彼女と何度か連絡し合った。渡英後、この方は彼の地でのわたしの身元保証人となってくださり、大変な恩義を蒙ったのであるが、実は渡英前にも、わたしはいくらか内心焦っていたのだろう、彼女に彼の地に適当な就職口はないものだろうかとお尋ねしている。もはや詳細は覚えていないが…。そして彼女から或るところでチャイルド・サイコセラピストの公募があると知らされ、どうやらわたしは彼女を通して応募したようなのだ。記憶がまるで曖昧なのだが…。当時「オペア(Au Pair)」の斡旋協会が東京にあり、英語学校に通いながら、家庭に住み込んで家事手伝いや子どもの育児にも携わるといった趣旨が宣伝されていて、わたしは「渡りに船」とばかりに飛び乗った。取り敢えずはあちらの子どもの養育環境を知らなくては思っただけで。これはチャンスだと…。1972年の初夏であった。

ところが、現実に彼の地に赴いて自分の英語力の程度がわかった。とても使い物にならない。専門職など問題外だった。ところが程無く、Dr. M. Carvelを介して応募した先方から「面接にどうぞお越しください」というお招きの電話をホームステイ先でもらった。それで、やむなく応募を取り下げにわざわざ先方先に出掛けていくことになった。身の程知らずというか、ほんとうにお恥ずかしい限りだった。電話で一言お断りを言えばそれで済んだとも思えるのだが…。そしてお会いして下さった相手というのが、【St. Geroge's Hospital】(Department of Child Psychiatry)の主任Dr. David Walk (Child Psychiatrist)なのであった！彼はまさに英国紳士の典型で、‘ホスピタリティ精神’を発揮して下さり、わたしに飽くまでも丁重だった。そして、まったくあちらの事情に疎いわたしを察して下さって、イギリスでチャイルドセラピイの訓練機関というのが3つあるということを教えて下さった。「ハムステッド・クリニック」もその一つだが、他に「タヴィストック・クリニック」というのがあり、そちらがお薦めだと、彼はわたしに語った。実に有難かった。早速「タヴィストック・クリニック」から案内書を取り寄せてみて、トレーニングが「乳児観察」から始まるということに心が動いた。面白そうじゃないかと…。そこで「タヴィストック」へコース受講申込書を郵送し、マーサ・ハリスからの「面接」の連絡を待つこととなった。そして半年以上も待たされて、ようやくお会いできて(それは1973年3月9日のこと)、意外にもわたしは正規のフルタイム・トレイニーとして受け入れられたのであった。今思えば、呆れた話なのだが、この訓練機関がクライン派の伝統を汲むそれであるなど、わたしは知らなかった。誰からも言われなかったし、わたしは「メラニー・クライン」について当時まだまったく無知であったわけで…。マーサ・ハリスはまるで拘泥していなかった！わたしは聞かれもしなかったのだから…。それでとにかくにも「見るべきものはありやしや…」ということ。それは中に入ってみないと解らないわけで…。取り敢えず「乳幼児観察」をするのもいいだろう。「見るべきものを見るために…」、その何かきっかけになればいいぐらいにしか思っていなかった。なぜか迷わなかった。

それから訓練生になって1年も経たない或る日のこと、マーサ・ハリスからお話があった。【St. Geroge's Hospital】の「Department of Child Psychiatry」にチャイルド・サイコセラピスト・トレイニーのポストの空きがある。応募してみてもどうかと…。(1974年5月9日のこと)。それはたまたま「タヴィストック」でわたしの担当指導教官だったMrs. クロケットが妊娠のため退職なされるとかで、その後任だと聞かされた。お薦めだと彼女本人からもわたしは言われた。心が動いた。

実は、当時わたしは無職だった。わたし以外に同期で職の無い人などいなかったはずだ。ロンドン郊外のSidcupにあった児童養護施設『ホリス』でアシスタント・ハウス・ペアレントの仕事をしていたのだが、鉄道ストライキが頻繁となり、「タヴィストック」でのイーヴニング・セミナーへの参加がままならなくなったのを理由に、やむなくそこを6ヶ月で退職していた。そしてロンドン中心部のベイカー・ストリート近辺のフラットに移り、地の利を生かし、そこを活動拠点にDay Hospital, Deprived Family Centre, Nursery School, Play Groupなど、さまざまな子どものいる場所に精力的に赴いて、ひたすら「観察 observation」に専念していた。マーサ・ハリスはそんなわたしを気遣って下さり、折々にチャイルド・ケアのアルバイト程度のお話などあったりもしたが、わたしの心は動かなかった。そこに舞い込ん

だのが【St. George's Hospital】のチャイルド・サイコセラピスト・トレイニーのお話だったのだ。そしてわたしは、【St. George's Hospital】に面接を受けに出向いたという次第なのだ。そこで、Dr. David Walkはじめ、ジョン・ブレンナーなど錚々たるお偉方の紳士たちにお会いしたのだが、もうその時点ではマース・ハリスと昵懇の間柄のジョン・ブレンナーはわたしを受け入れる心づもりを既になさっておいでで・・・。話はとんとんと進んでいったのである。（尚、初出勤は1974年9月10日であった。）

今振り返って思うに、怖くなかったはずはない。だが、一貫してわたしは至って意気軒昂だったのである。「見るべきものを見るために・・・」というのがあったのだから。確かに渡英前にもなぜかくわたしなら出来る！>という思いがあった。それだって、まるで「夢みる夢子さん」といったふうでしかなかったわけで・・・。だが、さすがにことがいよいよ本格的に動き始めたとき、確かに一瞬怖い！と思ったのを覚えている。まだ夏季休暇中で人気のない病棟に訪れると、秘書のジーンがわたしをわたしの部屋に案内し、鍵を手渡してくれた。ああ、ほんとうにここで始まるんだと思ったとき、からだが一瞬竦んだ。頭を抱えてそのまましゃがみ込んでしまった。ほんとうに大丈夫かと・・・内心^{おの}慄いた。だが、「見るべきものを見るために・・・」と、再び自分を立て直した。そうした臆病風に吹かれることはその後二度となかった。実際のところ、ジョン・ブレンナーがわたしを彼の庇護下に抱えてくださっていた。彼に言われたとおりに手渡されるケースを一つずつこなしてゆくだけ。彼からスーパービジョンを受けながら・・・。そして「タヴィストック」での研修セミナーにも参加し、「パーソナル・アナリシス」も始まっていて結構忙しかったわけで・・・。

やがて「見るべきものを見るために・・・」がすべて終わる日が来た。（帰国は、1979年10月19日。）だが、不思議なことに帰国して何十年経ても、ずうっと当時のことが振り返れずにいた。自分が何をしたのか、それが無益とも思わなかったが、彼の地で出会った子ども患者たちに対してのわたしの想いは複雑で、わたしのなかでなかなか直視し得なかった。彼の地から持ち帰ったファイルは段ボール箱の中にそのままだった。そして今ようやくにして、ここに開示することができた。一人ひとり彼らが愛^{いと}おしい。そして今更ながらわたしは‘宝物’を持っていたことを知った！

すべてが【京都大学・教育学部】での地下のセラピールームでの‘衝撃’から始まった。そして「見るべきものを見なくては・・・」と思ったのがことの始まりだった。この流れがやはり不思議に思われる。渡英、そして「タヴィストック」、さらにはSt. George'sと・・・。そこに何かしら‘大きな力’が働いてでもいたような・・・。そして、今ここに至って、彼の地でわたしが手掛けた臨床例がこのようなかたちで我が国でも知られるものになろうとは・・・！これが一体何を意味するのか、わたしには解らない。とにもかくにもわたしにとって彼の地ロンドンで「見るべきものを見なくては・・・」とは何であったのを振り返ってみた。そこで出会った「分析の子どもたち」の症例をここに公開した理由は、一つはっきりしている。現在わたしのもとに「パーソナル・アナリシス」を受けにお通いの専門職の方々にとって、もしかしたら自分の内なる「子どものわたし」との出会いへ向けて、あの「分析の子どもたち」が‘牽引力’になってくれるかもしれないと思ったこと。精神分析がとことん徹底して‘自己’に根付いたものになるためにも・・・。

それからもう一つ、昨今、日本においても児童臨床に関心を寄せる人たちが増えてきていると聞いている。そこでわたしの「タヴィストック」での1970年代の臨床経験が幾らか刺激になるかも知れない、とふと思った。手渡せるものなら手渡したい、そして日本の児童臨床の未来を‘あなたに’託したい。そのように、わたしの心が動いたのである。

わたし個人としては、何よりも、彼の地でわたしが薫陶を受けたジョン・ブレンナー、マーサ・ハリス、そしてドナルド・メルツァーについて、こういうかたちで何かしらお話しができたことに格別の嬉しさがある。その意味で、これは「誰かの子ども」でいられたあの当時のわたしの「愛の形見」といえなくもない。

(2018/06/25 記)

【参考文献】

- ・Klein, Melanie(1930) : 「The Importance of Symbol-Formation in the Development of the Ego」(邦訳;「自我の発達における象徴形成の重要性」メラニー・クライン著作集1. 誠心書房 265-281,1983)
- ・Issacs, Suzan(1948) : 「The nature and Function of Phantasy」
International Journal of Psycho-Analysis, 29, 73-97
(邦訳;「対象関係論の基礎」クライニアン・クラシックス、松木邦裕監訳.
新曜社 97-172, 2003)
- ・Seagal, Hanna(1957) : 「Note on symbol-formation」
International Journal of Psycho-Analysis, 38, 391-7
(邦訳;「象徴形成について」、「メラニー・クライン トゥデイ②」
E. B. スピリウス編松木邦監訳. 岩崎学術出版社 12-33,1993)
- ・Meltzer, Donald(1963) : 「The Social Basis of Art: A Dialogue with Adorian Stokes」 in 「The Apprehension of Beauty」,
The Clunie Press, 206-226, 1988.
- ・Meltzer, Donald(1967) : 「The Psycho-analytical Process」
(邦訳;「精神分析過程」. 松木邦裕監訳・飛谷渉訳. 金剛出版 2010.)
- ・Seagal, Hanna(1973) : 「Introduction to the Work of Melanie Klein」
(邦訳;「メラニー・クライン入門」. 岩崎徹也訳. 岩崎学術出版社 1977)
- ・Seagal, Hanna(1991) : 「Dream, phantasy and art」
(邦訳;「夢・幻想・芸術—象徴作用の精神分析理論」. 新宮一成他訳.
金剛出版 1944)
